【土木計画学研究・講演集 No.24(1) 2001年11月】

「人と建築物と海」の空間関係からみた海景観賞の型の考察*
ー「江戸名所図会」を事例としてー

A Study on Types of Seascape Appreciation Composed of "Man, Buildings, and the Sea"*
ーUsing "EDO-MEISHO-ZUE" as Examples ー

島妃沙子**・横内憲久***・岡田智秀***
By Hisako SHIMA**・Norihisa YOKOUCHI***・Tomohide OKADA***

1. 研究目的

広大な海をはじめとするウォーターフロントならではの景観(これを海景とする)を観賞する方法は、海景とそれを眺める人との間に建築物を介在させることで、さまざま生み出されていくと考えられる。

そこで本研究では、後述する事由により「江戸名所図会」を用いて、「人と建築物と海」の3要素の関係から創出される「海景観賞の型」を明らかにすることを目的とする。これによって、海景を望める名所における人と海景との典型的な関わり方が得られ、わが国のウォーターフロント計画における今後の景観デザインのあり方に、示唆を与えることができると考える。

2. 研究方法

(1) 分析資料の選定

本研究において「海景観賞の型」を把握するにあたっては、わが国固有の海景観賞に基づき、長年にわたり多くの人々に評価を受け続けてきた資料を用いることが肝要であると考え、欧米文化が移入される以前および地形が多様な状況を保っていることなどを踏まえ、分析資料としては、わが国の魅力的空間ともいうべき名所が描写された、「江戸名所図会、全七巻・二十冊」[1) 2)]を対象とした。

(2) 分析対象絵図の抽出

分析資料において「人」「建築物」「海景」という3要素が関係する空間構成を捉えるために、3要素が同時に描かれている絵図を抽出し、分析対象とする3要素は、「江戸名所図会」に記載されている各名所(事例)の解説文から景物となる「海景」を抜き出し、それと関連の深い「人」と「建築物」を絵図から特定する。

以上によって得られた分析対象絵図は、「江戸名所図会」に掲載された全絵図(649事例)のうちの21事例となり、このうち1枚の絵図であっても3要素の関わり方が複数特定できたことから、合計31景を抽出した。

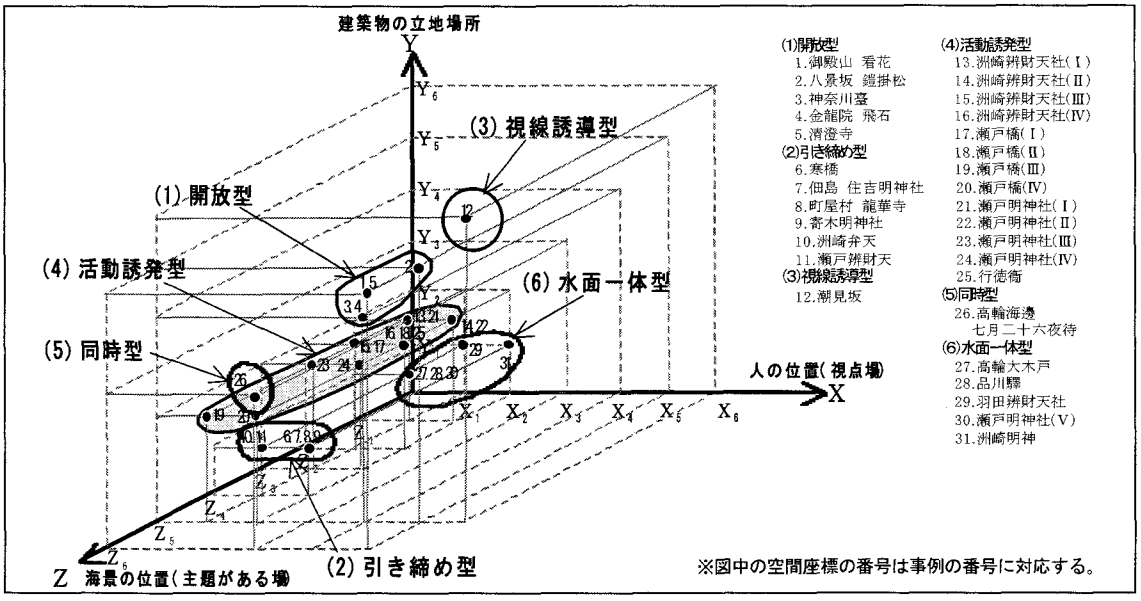
(3) 抽出された対象絵図から型を得る方法

抽出された対象絵図(31景)から型を得るために、特定された「人」「建築物」「海景」の3要素による空間構成と各要素それぞれの空間状況を把握する。

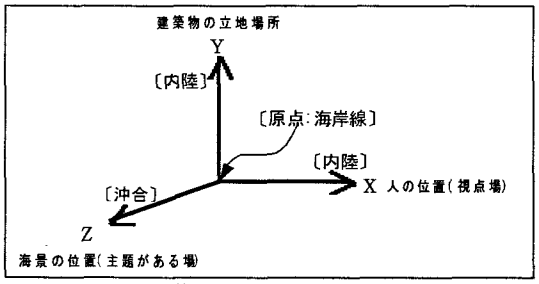
空間構成を把握するためには、まず「人」「建築物」「海景」の3要素の海岸線からの位置を捉え、それらの座標を図ー1に示す各軸上(X、Y、Z軸)に布置し、3要素の交点である空間座標を求める。なお、図ー1の3軸は、原点を海岸線として、X軸は人の位置(視点場)、Y軸は建築物の立地場所、Z軸は海景の位置を表しており、各軸いずれも原点から離れるほど海岸線から遠ざかる(「人」と「建築物」は内陸方向、「海景」は沖合方向へ)。そうして3要素の座標の交点を求めた結果、図ー2が得られた。また、各要素それぞれの空間状況については、分析対象とした絵図とその解説文から把握し、表ー1に整理した。

以上の方法によって得られた図ー2に示す空間座標の集合具合と表ー1に整理した3要素における空間の「状況」の共通性を照らし合わせ、6つの「海景観賞の型」に類型化した。以降では、これら6つの型の意味と特徴を述べることとする。

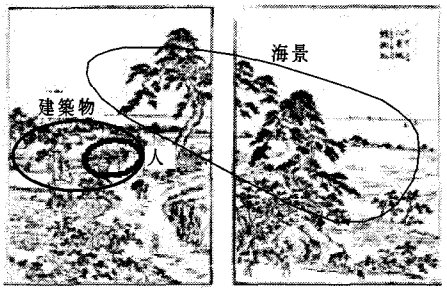
*Keywords 景観、親水計画、空間整備・設計、地域計画
**学生会員、日本大学大学院理工学研究科海洋建築工学専攻
***正会員、工博、日本大学理工学部海洋建築工学科
(〒274-8501 千葉県船橋市習志野台7丁目24番地の1、
Tel&Fax 047-469-5427)



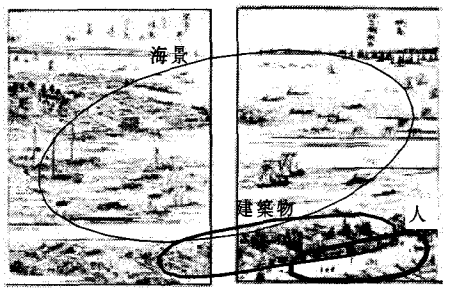
図－2 「人と建築物と海」の関係からみた海景観賞の型



図－1 「人と建築物と海景」の関係を捉えるための３軸



図－3 2. 八景坂鎧掛松



図－4 7. 佃島 住吉明神社

３．型の意味と特徴

（１）開放型

表－1よりこの型は、自然物の名所である高台において、視点場となる建築物が大きな開口部をもつことで、建築物内に居ながら、眼前の自然物（近景）と眼下に広がる海（遠景）が一体となって一望できるものである。例えば「2. 八景坂鎧掛松」（図－3）では、解説に「この地より望めば、海上眼下にありて美景の地なり」とあり、また鎧掛松は、「枝葉柳条のごとく垂れ下がりて、地を離るること、その間わづか四、五尺に過ぎず。」と記述され、荒磯松、磯馴松等の別名もあることから、美しい海が俯瞰で眺められ、その海に向けて眼前の松の枝葉がまるで波に打たれるように枝垂れている状況が読みとれる。ここでは、観賞の場（視点場）である茶屋（建築物）が柱と屋根のみの構成で視界が開放され、視点場付近の自然物が海へと視線をつなぐことで、まちなかの高台から眼下の「海景」を愛でることができる。

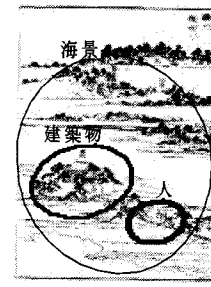
（２）引き締め型

表－1に示すようにこの型は、広大であるために茫洋としがちな海景を、建築物が引き締めて見せる特徴があり、その引き締めの方法については２種類がみられた。一方は、広大な海景が建築物の間隙（スリット）を介して眺められるものである。例えば「7.

表－1 「人」「建築物」「海景」の状況と「海景観賞の型」の成立要因

型名	No	絵図名	人		建築物		海景	
			状況	型の成立要因	状況	型の成立要因	状況	型の成立要因
(1)開放型	1	御殿山 看花	・建築物内から海に向かって桜を眺める。	開放的な建築物の内部から視点場周辺の自然物と遠方の海景を眺める。	・高台の桜の名所に立地する。 ・柱と屋根で構成される。	海側に開口部がある建築物の内部にいることで、開放的で広大な海を眺めることができる。	・海面が広々と見渡せる。	開放的な建築物の内部にいる人が、視点場付近の自然物ともに眺めることができる。
	2	八景坂 鎧掛松	・建築物内から海に向かって松を眺める。		・高台の松の名所に立地する。 ・柱と屋根で構成される。		・海面が広々と見渡せる。	
	3	金龍院 飛石	・建築物内から海を眺める。		・高台に飛石がある名所に立地する。 ・柱と屋根で構成される。		・海面が広々と見渡せる。	
	4	神奈川臺	・建築物内から海を眺める。		・落から切り立った高台に立地する。 ・海側を柱のみで全面開口する。		・海面が広々と見渡せる。	
	5	清澄寺	・建築物内から日の出を眺める。		・小高い山の緑豊かな森に囲まれて立地する。 ・海側を柱のみで全面開口する。		・海面が広々と見渡せる。	
(2)引き締め型	6	袈裟橋	・海道を歩行する。	海道を移動しながらスリットから眺められる海景の移り変わりを楽しむ。	・海岸線沿いに軒を連ね、スリットがある。	海岸線沿いにある建築物間の隙間(スリット)からは、ヒューマンスケールに引き締められた海景が眺められる。	・帆船が航行する。	建築物の間隙(スリット)から垣間見られることで、視線が定まらない茫洋とした海景が引き締められる。
	7	佃島 住吉明神社	・海道を歩行する。		・海岸線沿いに軒を連ね、スリットがある。		・漁船や商船が航行する。	
	8	寄木明神社	・海道を歩行する。		・海岸線沿いに建つ。		・大海原を漁船が航行する。	
	9	町屋村 龍華寺	・海道を歩行する。		・海岸線沿いに建つ。		・船が航行する。	
	10	洲崎弁天	・海に突き出した海道にいる。	海道から建築物によって引き締められた海景を眺める。	・海に突き出た出島の海岸線に建つ。	建築物が広大な海の出島に建つことで、アイストップとなり海景を引き締めている。	・大海原漁船が航行する。	茫洋とする海の自然景観が、出島上にある建築物によって、引き締められた海景となる。
	11	瀬戸辨財天	・海に突き出した海道にいる。		・海に突き出た出島の海岸線に建つ。		・波風が穏やかな大海原である。	
(3)視線誘導型	12	潮見坂	・海に向かって伸びる街道上から海を眺める。	沿道両側の建築物に視線が誘導されて、海景を眺められる。	・海を望める丘陵の斜面に立地している。 ・海へ向かって伸びる沿道の両側に軒を連ねる。	沿道両側の建築物が海へ視線誘導するため、海から遠く離れた丘陵からも海景が眺められる。	・海面が広々と見渡せる。	まちなかの視点場から、建築物に視線を誘導されて眺められる。
(4)活動誘発型	13	洲崎弁財天社(I)	・海岸線沿いから遠眼鏡で海景を眺める。	海景が変化するごとに建築物の内外を行き来しながら眺める。	・海岸線から後退して建つ。 地面と近い高さの座敷をもつ。 ・海側全面に縁側と開口部をもつ。	地面と近い高さに座敷があり海側全面に開口部があることで、屋内外の行き来を促している。	・春先の砂浜で人々が潮干狩りをする。	潮の干満に伴い多様に変化することで人の興味を引き付け、様々な人間活動を引き起こす。
	14	洲崎弁財天社(II)	・茶屋の縁台に座る。				・冬の干潮時の水辺に千鳥が活動する。	
	15	洲崎弁財天社(III)	・海岸線沿いから遠眼鏡で海景を眺める。					
	16	洲崎弁財天社(IV)	・茶屋の縁台に座る。					
	17	瀬戸橋(I)	・海岸線沿いから海景を眺める。		・海岸線から後退して建つ。 ・地面と近い高さの座敷をもつ。 ・海側全面に縁側と開口部をもつ。		・干潮時の干潟に水鳥が群り立つ。	
	18	瀬戸橋(II)	・料亭の座敷から海景を眺める。					
	19	瀬戸橋(III)	・海岸線沿いから海景を眺める。				・満潮時の入り江に海水が満たされる。	
	20	瀬戸橋(IV)	・料亭の座敷から海景を眺める。					
	21	瀬戸明神社(I)	・海岸線沿いから海景を眺める。		・海岸線から後退して建つ。 ・地面と近い高さの座敷をもつ。 ・海側全面に縁側と開口部をもつ。		・松の古木が浦風になびき、波に洗われる。	
	22	瀬戸明神社(II)	・茶屋の縁側から海景を眺める。					
	23	瀬戸明神社(III)	・海岸線沿いから海景を眺める。				・出島の縁にある松が打ち寄せる波に洗われる。	
	24	瀬戸明神社(IV)	・茶屋の縁側から海景を眺める。					
	25	行徳船	・縁側から海景を眺める。		・海岸線から後退して建つ。 ・地面と近い高さの座敷をもつ。 ・海側全面に縁側と開口部をもつ。		・海上に千鳥が飛び交う。	
(5)同時型	26	高輪海邊 七月二十六 夜待	・海岸線から後退して建つ建築物の二階から海を眺める。	高い位置の座敷(2階)から陸と海のにぎわいと海景(水平線)を眺める。	・海岸線から後退して立地している。 ・高い位置に座敷がある。	陸・海のにぎわいの景と海景を、一体に見せる。	・月が水平線から昇る。 ・月の出を待って海辺でにぎわう人々。	水平線と、陸と海で一体となったにぎわいが同時に眺められる。
(6)水面一体型	27	高輪大木戸	・茶屋の縁台に座る。	海岸線沿いの建築物による空間で水面との距離が物理的にも精神的にも近くなる。	・海岸線に接している。 ・海側を全面開口している。	海側全面の開口部や低い座敷をもち、海岸線沿いに建つことで、水面に極めて近い位置に視点場を置くことができる。	・砂浜が浦波に美しく洗われる。	海岸線付近の情景により水面がかもしだす雰囲気を高めている。
	28	品川驛	・料亭の開口部から海景を見る。		・海岸線に接している。 ・海側を全面開口している。 ・水面と近い高さに座敷がある。		・海岸に夕凪がおこる。	
	29	羽田明神社	・茶屋の縁台に座る。		・海岸線に接している。 ・柱と屋根と座敷のみで構成される。 ・水面と近い高さに座敷がある。		・波に打たれながら松や苔が繁茂する。	
	30	瀬戸明神社(V)	・茶屋の縁台に座る。		・海岸線に接している。 ・海側を全面開口している。 ・水面と近い高さに座敷がある。		・松の古木が浦風になびき、波に洗われる。	
	31	洲崎明神	・海岸線沿いにいる。		・海岸線に接している。 ・スリットがある。	建築物の額縁効果で水面を際立たせる。	・雁木から荷の積み降ろしがされる。	建築物の額縁効果で水面が強調され、一体感を感じさせる。

佃島住吉明神社」（図－4）は、「建築物」が海岸線沿いに林立し、「人」は海道を移動しながら海道沿いの「建築物」のスリットにより引き締められた「海景」をシークエンス景観として眺められる。他方は、広大な海景において、建築物がアイストップとなり、空間が引き締められるものである。「11．瀬戸辨財天」（図－5）でいえば、出島上にある「建築物」が、茫洋で単調となりがちな「海景」を引き締めている。



図－5 11．瀬戸辨財天

図－6 12．潮見坂

（3）視線誘導型

表－1よりこの型は、視点場と視対象（海）との大きな高低差や海方向へ建ち並ぶ沿道の建築物が、遠方に広がる海に向けて視線を誘導するものである。「12. 潮見坂」（図－6）でいえば、「海景」の主題となる海は、ふもとの街並みを越えた遠方にあるため、海岸線から離れた内陸の視点場からは、ややもすれば「海景」を意識しにくいが、海に向かって下る坂に沿って「建築物」が建ち並ぶことで「海景」へと視線が誘導される。

（4）活動誘発型

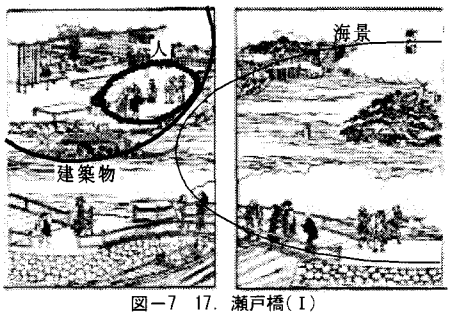
この類型では、建築物が屋内外を行き来しやすい立地や形態をしているため、潮の干満に伴いさまざま変化する海景に対して、離れる・近づくという活動を誘発させている（表－1）。「17. 瀬戸橋（Ⅰ）」（図－7）では、解説に「橋の下より潮さし入りぬれば、はるばる遠き山の奥まで湖水となり、潮引きぬれば水鳥も陸にまどうにこそ、水陸の景気も朝夕にかはり、」と記述され、潮の干満とそこに息づく生物との関わりが愛でられていることが読み取れる。「建築物」は、海側に大きな開口部や縁側を有し、その開口部を通してそうした「海景」に意識を向けさせ、縁側によって「より近づいて見る」という行為を誘発している。

（5）同時型

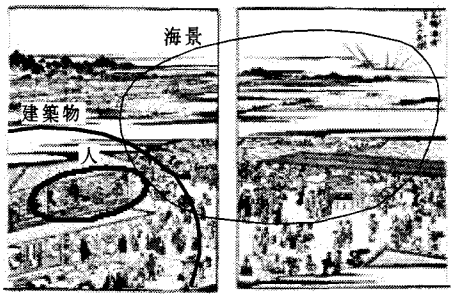
この型は、陸上と海上のそれぞれにおいて創出されたにぎわいが、高い視点場から同時に視体験できることで、陸と海という異なる空間の一体感が享受できるものである（表－1）。「26. 高輪海邊七月二十六夜待」（図－8）では、「建築物」が海岸線から後退することで海道（陸側）ににぎわいが創出され、そのにぎわいは海上の船舶群のにぎわいと一体的に眺められる。そうした一体的なにぎわいを酒楼二階の高い視点場から眺めることで、陸と海を同時一体的に楽しむことができる。

（6）水面一体型

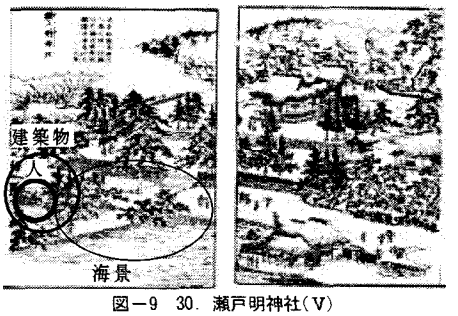
この型は、接岸した建築物の内部から低い視点で水面との一体感が楽しめるものと、建築物のスリットが水面を際立たせるものの2種類の特徴がみられた（表－1）。例えば前者に該当する図－9の「30. 瀬戸明神社（Ⅴ）」では、海岸線に接した建築物の屋内には、水面との高低差が小さい座敷が設けられ、解説より「打ち寄する浪は下枝を洗ふ。」といった眼前の松が波に洗われる様子が愛でられたことがわかる。ここでは、そうした海岸線付近での水面が醸し出す雰囲気を屋内で享受できるものである。後者の「31. 洲崎明神」では、護岸が雁木（階段状の護岸）であることで波の動きが感じられ、視点場からは、その両側にある「建築物」の額縁効果（フレーム）により雁木やその周辺の水面が際立ち、その水面との一体感が享受できる。



図－7　17. 瀬戸橋（Ⅰ）



図－8　26. 高輪海邊七月二十六夜待



図－9　30. 瀬戸明神社（Ⅴ）

【参考文献】
1）石川英輔ほか：原寸復刻江戸名所図会、上・中・下巻、評論社、1996.12
2）市古夏生・鈴木健一：新訂江戸名所図会、全8冊、筑摩書房、1996.10～1997.2